

## 平成27年度 学校自己評価（後期）分析と考察 等について

菅平小・中学校では、学校目標「郷土を拓く大地の教育」のもと、日々の教育活動を行って参りました。この菅平小・中学校を更により良いものにするため、本年度も1学期（前期）、3学期（後期）に保護者の皆様にアンケートを実施いたしました。ご協力ありがとうございました。また、児童・生徒、教職員も同様にアンケートを実施し、その結果から以下のように考察いたしました。このアンケートから示唆されたことを真摯に受け止め、日ごろの教育活動を振り返るとともに、今後の方向を示しましたのでみなさまにお知らせいたします。

※分析および考察中のA、B、C、Dは、「かなりできている（かなりそう思う）」・「どちらかという、できている（どちらかという、そう思う）」・「どちらかという、できていない（どちらかという、そう、思わない）」・「ほとんどできていない（ほとんど思わない）」に、それぞれ対応しています。

## 【教育活動】

## §1 生徒指導

<発見と啓発> 相手の良さに気づき、発信しているか。

(小) 前期と比べ、AからB、BからCへスライドしている。しかしDからCへの向上も見て取れるため、底上げが図られたのではないかと。

(中) 後期の段階では、小学校と似た傾向を示すものの、A・Bの合計が、C・Dを上回るといった改善が見られた。

<相手意識のある挨拶> コミュニケーション能力を高めているか。

(小) C・Dの合計が10ポイントを下回るといった変化が見られた。

(中) Aの値が倍増したことは良い傾向であるが、C・Dの合計が25ポイントとなった。

<「§1 生徒指導」についての考察と方向>

前期に注目していた“あいさつ運動”は、小学校では継続して行われているものの、中学校では引き継ぎの時期ということもあり、やや消極的になっています。成果の上がっていることについては継続していきたいと考えています。もちろん全て、児童会・生徒会にゆだねるということではなく、職員自ら実践すべきひとつとを考えます。

## §2 学習活動

<学習の約束> 学習習慣の定着は図られているか。

(小) 前期とほぼ同様の傾向を示している。わずかではあるが、CからBへの移行が見られるのは良い傾向ではないかと。

(中) Aが0ポイントとなる一方、Dが5ポイントと全体的に右肩下がりの傾向を示した。例年、冬期になると示す傾向ではあるが、学習習慣の不安定さを物語っている。

<学力定着> 小・中学校の先生が連携して授業を行っているか。

(小) Aがマイナスポイント分が、そのままBへ移行したように見られる。Dが0ポイントとなったことは喜ばしいこと。

(中) 前期に比べ、AとBの数値が逆転している。この時期は、小中乗り入れの授業もほぼ完了して行くため、このような傾向を示したと思われる。

<授業改善> 分かりやすい授業になっているか。

(小) 前期と同様の傾向とみて良いだろう。

(中) BからCへの移行が若干みられるものの、前期と同様の傾向とみて良いだろう。

<「§2 学習活動」についての考察と方向>

小学校に乗り入れている中学校教師の小学生への関わりについては、上位は下がったものの下位は向上したとみると、コミュニケーションへの要求レベルは適切に近づいたとみても良いかと思えます。前期の反省が生きている点と考えます。

授業改善については、劇的な変化は見られないものの、「子どものがんばり」と「教師のがんばり」が近づいてきたと思えます。より一層の、理解につながる工夫を心がけていきます。

## §3 キャリア教育

<地域との交流> この地での生活に喜びを感じているか。

(小・中共通) 前期と大きな変化はないが、小・中学生のほとんどがこの地での生活に喜びを感じていることは間違いなさだろう。

<地域を知る> 地域の産業を理解しているか。

(小・中共通) 地域の目玉産業の一つであるスキーが本格的に行われているこの時期だが、直接そこに携わっているという意識は低いかもしれない。

＜「§3 キャリア教育」についての考察と方向＞

この時期、小学校の農業につながる学習は一段落はしているものの、高い意識が維持されていることは喜ばしいことと思います。中学校は、スキー教室補助を通して実感してもらいたい願いがありました。事前の意識付けが十分とは言えなかったせいなのか高い結果が得られなかったと思います。スキー教室で関わりのあった小学生からのお手紙なども来ていることから、後付けとしての指導で補っていきたいと思います。

【学校運営・学校作り】

※表記が長くなるため、“小学校保護者”を「Ⅰ類」、「小学校教師」を「Ⅱ類」、「中学校保護者」を「Ⅲ類」、「中学校教師」を「Ⅳ類」と表記しました。

子どもの良さを見つけること

(小) Ⅰ類が前期同様だが、Ⅱ類は下降した。前期に比べると座学の時間が減っていることと、この時期にまとめて中学校の乗り入れを計画した授業があったことにより、児童と向き合う時間の減少を感じているのかも知れない。

(中) 前期からの大きな変化は見られないが、Ⅲ類のCからBへの向上は大変良い傾向である。

優しく、厳しく子どもを導くこと

(小) 前期からの大きな変化はなく、良い傾向が継続しているものと思われる。

(中) 全体に向上傾向を示している。Ⅲ類・Ⅳ類ともに、C・Dが0ポイントになったのは、大きなことと思える。

楽しく分かる授業を創造すること

(小) Ⅰ類・Ⅱ類とも、関わりの減少は上記①にも繋がることとはあるが、スキー活動を言い訳にしないように考えたい。

(中) 前期と大きな変化はないものの、上記の小学校と同様に、進級や進路決定が迫られるこの時期だからこそ意識したい。

地域と連携すること

(小) 前期と同様と考えられる。

(中) Ⅲ類が若干低下したものの、Ⅳ類は向上した。

＜「学校運営・学校作り」についての考察と方向＞

ここ菅平小・中学校は2つの顔をもつ学校といえないでしょうか。

一つは、「少人数学習が自然と行われる学校」や「小・中併設校により、単一の小学校では望みにくい中学校職員の専門知識をタイムリーに得られる学校」、「単一の中学校では難しいとされる小学校からの成長の足跡を追える学校」など、昨今求められている、学力向上を図るための条件を十分に備えている“学力向上に理想的な学校”という顔。もう一つは、スキー活動を通して地域との繋がりが強い“開かれた学校”という顔です。

4月から9月までの前期が“学力向上に理想的な学校”、10月から3月までの後期が“開かれた学校”で、季節に左右されているところはありますが、前期では後期を意識し、後期でも前期を意識していくことで、通年で筋の通った“菅平学校”となるとと思います。

【その他】

学校生活のたのしさ

(小) 児童・保護者は若干下降気味の一方、職員は上昇している。児童の気持ちを置き去りにしないように心がけたい。

(中) 小学校同様に生徒は下降気味だが、保護者・職員は向上傾向を示している。こちらも生徒の気持ちを置き去りにしないように心がけたい。

＜「その他」についての考察と方向＞

児童・生徒の集計で、Aの欄を見れば前期からは5～10ポイント減とだけ見えるが、この項目を一年前の同時期と比べると、小学校は15ポイントの増で、中学校では15ポイントの減となっています。スキー活動中心のこの時期ですが、この差が生まれる原因として、「全校としての一体感」があるのではないかと思います。小学校のような校内大会を設けることは無理としても、学年を越えた一体感を味わえる何かを企画した方がよいと感じました。

問い合わせ先

菅平小・中学校 学校評価委員会

(担当) 松井康浩

TEL 74-2014 有線 2131